平成28年度UNBC交換留学報告†

―TESOL資格取得プログラムと英語コミュニケーション能力―

刑部　　周*・幡山　秀明**
宇都宮大学大学院教育学研究科*
宇都宮大学教育学部**

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第4号　別刷

2018年2月28日

平成28年度UNBC交換留学報告†
―TESOL資格取得プログラムと英語コミュニケーション能力―

刑部　　周*・幡山　秀明**
宇都宮大学大学院教育学研究科*
宇都宮大学教育学部**

2016年9月から2017年4月末までの間、カナダのノーザン・ブリテッシュ・コロンビア大学（UNBC：宇都宮大学と学術協定を結び、学生交流を行っている大学の一つ）にて交換留学として行った活動内容について報告する。主として、カナダでの大学生活および現地で取得した英語を母語としない英語学習者対象の英語教授法を学ぶTESOL資格取得プログラムの内容について述べる。ちなみにTESOLは宇都宮大学基盤教育の英語教員にも必須条件の資格である。最後に、筆者の留学経験に基づいて日本人に必要な「英語コミュニケーション能力」を定義し、さらにそれに伴う「思考力・判断力・表現力」の育成の重要性を提言する。

キーワード：交換留学、TESOL、英語コミュニケーション能力

1. UNBCでの大学生活

UNBCでの交換留学中の生活について、主に授業のシラバス・内容・評価をふりかえり、宇都宮大学の授業との差異を叙述する。

(1) シラバス

1回ごとの授業で、使用テキストの範囲、課題とその締め切り日等が定められており、学生は事前に確認し予習・準備をすることが求められる。特にテキストの予習は毎回30ページ前後におよび、週2回の講義に加えチュートリアルや課題もあるために非常に大きな負荷となる。日本人学生は優れた英語読解力を有さなければついていけない。また、課題量の多さから、学生が1学期に履修する科目数はおおむね4科目から6科目程度となる。

授業を進行する教員側にも、当然のことながら限られた期間内で授業を消化できる細かい計画性とマネジメント力が求められる。

(2) 授業内容

① 構成

一般的に授業は、大教室で行われる週2回の講義と、10人から20人程度のクラスサイズで週1回行われる学生同士のディスカッションを主体とするチュートリアルとで構成される。学生はそれぞれの科目につき週2回の講義と週1回のチュートリアルに参加する。チュートリアルでは、講義で扱うテキストとは別に、ディスカッションのための資料や文献の調査なども必要となる。

日本との大きな違いはチュートリアルの有無にある。毎回2、3本の論文を読んできた上でチューターが提議する議題についてディスカッションを行うチュートリアルでは、全員に参加･発言義務がある。そのため、学生全員が入念に準備しなければならない。またその性格上、常にエビデンスに基づいた意見が求められる。

② 課題

レポートやプレゼンテーション等は課題として必ず課せられる。特にレポートは2、3週間に1本、1学期で4、5本書く科目が多い。学生は、毎週の講義内容や作成中のレポート、またはレポートの評価結果について個々に講師や教授に相談し、チュートリアルの時間に進行中のリサーチについてプレゼン

---

† Shu OSAKABE*, Hideaki HATAYAMA**: Reports on the Experience of Exchange Program at University of Northern British Columbia in 2016
Keywords: Exchange Program, TESOL, Communicative Competence
* Graduate School of Education, Utsunomiya University
** School of Education, Utsunomiya University
（hatayama@cc.utsunomiya-u.ac.j：著者2）

テーションをすることもある。コースによってはインターンシップなどの職業実習が含まれる場合もある。

また中間・期末試験の問題は必ず使用テキストから出題されるため、日本の大学にあるような教員の専門性に偏った試験が作られることは少ない。シラバスと異なる内容の試験を課した場合にも、学生からの抗議で教員が謝罪し再試験を実施する場合がある。

(3) 出席・参加度に関する成績評価

程度に差こそあれ、教員からの一方通行で終始する授業というのは少なく、学生の積極的な参加が求められる。発言の無い学生は、成績評価項目の「授業への貢献度」が0点になる。

教員はなるべく多くの学生から発言を引き出そうと、消極的な学生も指名して質問を投げかける。特に日本人学生は消極的であると一般的にみなされており、ほとんどの日本人学生が出席こそすれ、実際には授業への参加・貢献度に関する評価では加点されていなかった。

2. TESOLプログラムの概要

次に、UNBCにて履修した国際資格TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages Certidicate）取得プログラムについて、授業の内容・評価・受講資格について説明する。

(1) 授業内容

TESOLの資格にはdoctor、master、diploma、certificateなどの区分があり、今回筆者が取得したものはTESOL Certificateという、比較的短期間かつ低コストで取得可能なものである。具体的には、冬期セメスター限定の集中講義（毎週土曜日9時から16時まで開講）であり、受講料は約1,150カナダドル（約11万円）であった。

テキストは第二言語習得論と英語教授法の入門書（*Techniques and Principles in Language Teaching 3rd Edition,* Diane Larsen-Freeman・Marti Anderson 共著 Oxford Univ. Pr. 2013）を使用した。学生は事前にテキストを読み、様々な教授法についての理解と問題意識を深めてから講義に臨む。講義ではロール・プレイング、模擬授業、当該指導法を用いた授業のビデオ映像等を通して学習した。

講義のテーマ・内容はおおむね以下のようなものだった。

・言語習得理論
・英語教授法
・英文法・語法
・教材開発
・模擬授業
・評価論
・プレゼンテーション（教材開発・模擬授業にて）

宇都宮大学で開講されている科目では教育学部における英語科教育法Ⅰa・Ⅰbの内容がこれに近く、留学前に同授業を履修したこともあり、英語で行われる当講義も容易に理解することができた。

(2) 成績評価

TESOL資格取得プログラムは資格取得のための講義であり、成績は出席（10%）、レポート（10%）、模擬授業（30%）に加え、最後に筆記試験（50%）で60%以上の得点率を得る必要があった。しかし、試験内容は基礎的な文法問題と教授法に関する記号選択問題、そして特定の教授法に基づいた指導案作成と、テキストと講義の内容を理解してさえいれば解答できるものばかりであった。

(3) 受講資格

担当教員はUNBC教育学部学部長であり、受講者には非ネイティヴ英語話者に対する英語指導者として相応しい英語運用能力を有するか否かがまず確認される。講師によると、ESLコースの学生は履修できないとのことだった。筆者は日本人交換留学生だったため、適性の是非を判断された後、無事受講資格を得ることができた。

3. 英語コミュニケーション能力とは？

留学中の経験を通して得た知見のひとつに、「英語コミュニケーション能力の実体」があげられる。具体的には、昨今の日本人の課題とされる英語コミュニケーション能力とは、「英語を用いて他者との対話を図り、自らの目的を達成する方略的能力」であるといえる。

例えば、チュートリアルでのディスカッションの際、多くの学生が個人的な思い込みや感情論で議論をする中、事実に基づいた意見を述べることで他の学生を説得できるかどうかは、発言者の英語の流暢さや文法的な正しさよりも、相手に自分の発言内容に注意を促す能力とそれに値するだけの内容が優先される。また最終的には相手を納得させ議論を膨らませるという目的を達成する方略的能力が重要とな

る。

日常的なコミュニケーションにおいても、友人を週末映画に誘う際に「週末に暇があるか？」などといった婉曲的な問いから始めず、直接的に映画のタイトルと日時を知らせた上で誘いをかけた場合の方が、「友人を週末映画に誘う」という目的を達成することができる確率は高い。実際に筆者は留学当初は前者のような誘いをし、ルームメイトを困惑させてしまうという経験をした。

このようなことから、今後の日本の英語教育が目指すべき英語コミュニケーション能力とは、「英語を用いて他者との対話を図り、自らの目的を達成する方略的能力」に他ならないのではないかと実感した。またそれに加え、「他者との違いを生み出せる思考力・判断力・表現力」が備わってこそ、アカデミックな議論やビジネスの交渉などの場面でより一層影響力を持てるようになる。これら二つの能力を伸ばすカリキュラムや実践活動を充実させることこそが、将来のグローバル人材育成のカギとなるであろう。

平成29年10月26日 受理

Reports on the Experience of Exchange Program at University of Northern British Columbia in 2016

Shu OSAKABE*, Hideaki HATAYAMA**
* Graduate School of Education, Utsunomiya University
** School of Education, Utsunomiya University